

# 沖繩ん 建築紀伝

横断する眼差し

■ 1回 ■ 国場幸房(建築家)  
戦火と復興の中で

(去る大戦で戦場と化した沖繩。その荒野からの復興はその当時の建築界の方々と琉球政府、米軍陸軍省技術協力会が一丸となって行われた。一九五四年頃から七万五千戸の規格住宅や農村住宅のモデルが出来た。戦後の住宅は貧困の中で「台風」「白蟻」との戦いでもあった。木造茅葺、木造トタン葺き、木造セメント瓦、赤瓦葺きからブロック造、RC造へと。

国場幸房さんは一九三九年に生まれ、戦争を跨いで復興時に少年期を迎えた。戦後復興からの建設業界を名実共にリードしてきた国場幸太郎さんの甥にあたる。環境にも恵まれ、幸房少年は中学から東京で学び始め、大学卒業後も著名な設計事務所所に籍を置く。青年期を建築界の先端にて、肌で感じ取りながら本土復帰前に帰沖する。復興著しい沖繩から東京への学業生活と勤務、二〇年近くの東京での活動を抱えて、地元での設計活動を開始。復帰直前の国場ビルから最近完成した「美ら海水族館」ま

で、沖繩の時代を象徴する建築物を手がけてきた。ホテル、ムーンビーチは沖繩観光の先駆けでもあった。常に時代の風を意識しつつ沖繩の風土性を相対化した作品群と国場さんのヒューマンな人柄と混在させて語ってもらった。)

私は沖繩戦の五年前、那覇市上泉町で生まれ松下町で戦争にあった、近くの教会は憲兵隊が陣取り、時々男の人の悲鳴が聞こえたのを憶えている。十／十の空襲は庭の防空壕に隠れた。父は家族を防空壕に避難させた後、そのまま仕事場を心配して読谷の飛行場現場へ自転車で行った。姉と私、妹は母が負ぶって、姉は小学校四年生だったが一人で畳を抱えて防空壕に持ち込み皆で避難した。(兄は学童疎開で宮崎に行っていた)周辺の人たちも集まり一四／五名程になったかと思う。タマタマ空襲の最中にオシッコがしたくなり外へ出たら空が真っ赤に染まっていた。

何所かのドラマ伍が火の玉になって真っ赤な空を飛び散っていたのを鮮明に憶えている。その後、近くの墓に移動して避難、その夜は識名園の森へ逃げたという。私も防空頭巾を被って隣の小母さんにオッパ(背負う)されて家族と逃げた。有難いことに、オニギリを配っている人が居た。翌日の朝松下の我家に戻ったが、我家も含めて見渡す限り焼野原化しており、庭の木に一個のボンタンだけが残されていて、その時姉は泣き出したと話をしてくれた。焼け

跡の中から、茶碗類を抱えて再び避難する途中、戦闘機が空中に現われたのであわてて伏せたが、日本軍の戦闘機だったのでパイザイと叫んだのを憶えている。伏せた衝撃で茶碗は全て割れていた。私たちは運よく通りがかった国場組の車に便乗し祖父の住む山原へ避難した。

戦前、沖繩には大手建設企業があり、国場組設立当初は本島の僻地や、宮古等の離島の仕事を請け負った。最初の元請の仕事は郷里国頭の木造の辺土名小学校で、そこで父と母は出会い結婚した。

その後、国場組は明治橋建設の大きな仕事を受注するが、大きな赤字を出しながら見事完成させ、公的な機関からおおきな信用を得て、続けて仕事を受注することが出来た。その結果、戦時中の飛行場建設の多くを任された。その当時の特に飛行場建設の仕事は人海戦術であり、先ず、飯場を造ることが最優先であったらしい。私たち家族も住み家が一定ではなく、現場が変るたびに移動し、私が生まれるまでは、現場が家であったと聞く。

戦争が始まり、国場組も避難の準備に迫られた。現場の米俵をトラックに積んで国頭山原に向かった。道中、橋が破壊され、米俵を積み上げて橋を渡りきったという。国場組の社長である叔父の国場幸太郎はその当時福岡に居て帰れない状態だった。父の幸吉が大勢の人の中心になり戦争を乗り切った。

その当時の父は三九歳であり、今思うと、かなりの大仕事をよくやっていたのだと感心する。(幸太郎社長は戦後、一九四六年八月に密航で沖繩に帰り、同年の九月に国場組を再建している。)

戦時中は山原の祖父の家の更に奥の山の中に避難していた。父達は、長期戦に備えて、山を開墾し芋を植えていたが収穫を待たずに終戦を迎えた。戦後、私は一時期、国頭の浜の幼稚園に通っていたが、父の仕事の都合で具志川の川崎小学校に四年まで過ごし、その後那覇の城岳小学校に転校。城岳中学をへて上ノ山中学の二年終了後、東京の区立池袋中学三年へ編入した。



国場氏のスケッチ 高校2年  
1957年東京にて